

# シーカヤック イン 日本海（鎧 - 三尾）

1999・08・08（日）

加藤 一雄  
大塚 賢一

8月8日（日）このところ不安定な天気が続いていたが、今日は少し回復気味の天候になりそう。風は、4メートルで降水確率20パーセント。条件は揃った。4時半、姫路を2艇のシーカヤックを積んだカリブは、香住の直ぐ西の鎧を目差す。

パートナーは毎度のけんちゃんだが、仕事が大変でストレスが蓄積し爆発しそう。そういう私も腰のトラブルを含め、同様に爆発する気力も無くなるほどだ。

ブルーな気持ちに落ち込みそうな時、リオスで挨拶を交わす、義足の20歳くらいの青年とその父親を思い出す。彼は松葉杖でプールに来てクロール・バタフライをこなしてしまう。最近、ジムの方にも来出し、ランニングマシンに乗り出した。そして段々その動きも鋭くなってきているように思う。挨拶の笑顔が可愛い奴だ。父親はその側で見守りながら自分なりの運動をしている。彼らを見ていると、奮起せざるをえなくなるのは当然のようだ。

7時半、静かな小さな鎧の漁村につく。前回の下見が

有ったため、出艇地まで迷う事無く到着出来た。釣り人が一人ゴムボートをだし準備をしているだけで、ほかにだれも見当たらない。ここは、船着き場で魚の水揚げ場もあり、漁協もあるというのに。8時、海面も景色も静かな鎧港を出艇。

素晴らしい世界に「いいなー」と2人で確認しあう。20分ほどのパドリングで入り込んだ湾の奥から、あの余部鉄橋が飛び込んできた。定かではないが、強風にあおられ列車が転落し、下の蟹加工場に落ち、工場の人數人が犠牲になった。列車は、お座敷で廻送中だった。だから列車は 軽く風にあお

られたのか。鉄道側の管理責任を強く問われた痛ましい出来事だった。

この鉄橋と共に暮ら





している、この小さな部落の人たちは、今でも複雑な心境でこの橋を見つめているだろう。

余部をあとにし伊笹岬めがけショートカット気味に4キロのロングを頑張る。そこからは、御火浦(沐ノウ)の荒々しく侵食された岩壁や洞門、点在する異様な小島、そして右手には、日本海の水平線と、デッカイデッカイ青い空。興味深く散策しながら西へむかう。余部以後は、人の気が全く無く自然と対等していた

が、急に開けた穏やかな人の、においのする所に出た。大島に来た。この島には神が祭って有るようでお参りの人の



ため船着き場も設けてある。三尾の部落が左手に広がる。今日はここまでとする。直線で8キロ、実走10キロといった所か。これから、潜りと昼飯をはさんだ復路になる。

鋸先の東方で上陸ポイントを見つける。潜りの準備をしてると「監視船」の旗を掲げた漁師がやってきて「稚貝を放ってるので貝を採るな」と。われらは、土佐もりと、水中カメラを見せ「魚の写真を撮ったり、突くんた」とおい払う。その後も3回ほど来た。



こんな素晴らしい自然と自由の中にいるのに少し嫌になってくる。「この海の中の貝すべてがお前たちのものか？名前でも書いとけ」と言いたくなる。

そんな事でけんちゃんの土佐もりが大変有効だった。このあたりは、大きな魚が多く見られ、成果は、20センチくらいの鯛とサンバソウ、計3匹。

私は、アワビを狙ってたがまったく見つからず、大き

なサザエを8ヶほど取り、その後ラーメンを食いながら海の幸を戴く。「シーカヤック万歳」

